

「大都市圏のリバーフロント地域における住宅・都市整備のあり方」

座談会

出席者

高村義晴

立花直美

吉田清明

松下 潤 (司会)

(以上50音順)

司会 本日はお忙しいなか、「大都市圏のリバーフロント地域における住宅・都市整備のあり方」の座談会にお越しいただきまして、大変ありがとうございます。

ウォーターフロントの開発は今非常に注目されており、その整備のあり方についてもいろいろ論議されていますが、現実のプロジェクトを見ると種々問題もあるように思います。ウォーターフロント地域における住宅整備・都市整備の今後の方向について考えていくため、みなさんのこれまでのご経験をもとに率直なご意見を交換して頂ければと思います。

では、今まで日本人と水とがどういうふうに接してきたか、その辺りからお話し下さい。まず数多くの開発計画に携われてきた吉田さんからお願いしたいと思います。

吉田 東京は江戸の都市構造を基盤としています。明治16年の陸軍参謀本部陸地測量部が作成した東京の詳細な地図を見ますと、浜町のような大川端の沿岸は今は業務街に変わりつつありますが、一昔前は料亭が多かった。その地図によると料亭の前身は武家の下屋敷であったことがよくわかります。隅田川を景勝の地として意識し、水辺に沿って大きな屋敷を建てた。その景勝の地が後に高級なレクリエーションゾーンとして、料亭街に変わっていったわけです。そう考えると水は基本的に人間の原点といえますか、一種の心のふるさと、よりどころといった意識があるのだと思います。例えば、山の手の高台に屋敷を建てる場合でも、庭に池をおき、流れをつくるといったような、水を常に身近にある存在として据えたいという感覚が、日本人にはあるように思います。

立花 今、景観としての水というお話しがありましたが、生物が生きるための水というのは別に、日本人が水辺を好む、あるいは水と親しむということには景

観的な意味で、開放的な空間を求めての選び方というのが基本にあるような気がします。つまり、遠景、中景、近景の三つの景観をすべて享受できるような所で生活できたらそれはとてもいい居住環境になるだろうと思うんですが、現在の大都市で手に入る日常的な生活圏を考えると、近景はあるけれども、中景もなければ遠景もない。で、今水辺が問われてきているのも結局は中景、遠景を取り戻そうという意図がどこかにあるのではないかという気がしているんです。

高村 川や水と我々の生活とのかかわりについて考えると、歴史的過程の中でどこかそのかかわり合いをプツツと切ってしまったところがあるんだと思うんです。例えば私が以前に住んでいた盛岡の例を申し上げますと、川に面した建物がどういうふうになっているのかを見ても、全部がもう川に背を向けたような形で建ってきている。昔の、灯笼流しや襦 (みそぎ) に見られるように、川を神聖なものと考えていた生活から離れてしまっているんですね。

その上今のウォーターフロント開発というのは、単に水辺をデザインするというか、演出するというのか、視覚で見えるところだけでかかわり合いを設けようとしている。……お化粧みたいにですね。(笑声) それで必ずしもこの水辺がなければこの開発が成り立たないという形になっていない。ウォーターフロントといいながら、実は水と人とのかかわりという観点から十分議論されてこなかった背景があるように思います。



プロフィール

立花直美さん

1973年東京大学大学院修了。工学博士。建築環境工学環境心理学専攻。現在武蔵野美術大学造形学部建築学科教授。著作「都市の人間環境」(共著)共立出版、他。

立花 それはやはり治めることに一生懸命だったからでしょうね。

高村 そうですね。



プロフィール

高村義晴氏

昭和31年2月福井県生まれ。昭和55年金沢大学大学院を修了、同年4月建設省入省。61年盛岡市都市開発部次長、63年より国土庁大都市圏整備局整備課課長補佐。

立花 守るという方に対してかなりハードで、それは大変大事な役割だったと思いますが、国民生活のレベルが向上して豊かになってきて、実はもっと欲しいものがあつたことに気づいた、あるいは環境に目が向いてきた……。

高村 それに、ウォーターフロントの資質が十分に活用されていないのは、そのウォーターフロント地域のビジョンみたいなものがまだ十分に見えてきてないからじゃないですかね。

司会 では実際の開発に際してどういうことが重要になってくるでしょうか。

吉田 今大切なのは、水辺のスペースがあるから、水辺の空間を利用すれば高密度な住宅地が作れる、あるいは商業、業務地が作れるというのではなく、その空間が周辺の地域にとってどのような役割を担うのが妥当なのか、といった地域との関わりをきちっと据えて開発することだろうと思うんです。スペースがあるから、日影条件等が有利だから、あるいは超高層配置が可能だからといったマイナーな考え方でなく、もっと積極的な意味での活用が図られることが重要だと思いますね。

立花 地域と水とのかかわり合いが大事なのと同時に、極めて多様であるということは、すごく大切じゃないかと思うんです。生き物のいる空間、見るだけの空

間でもいいし、あるいは直接安心してピシヤピシヤと入って行けるものであってもいい。同じもの一色にする必要はないんです。また水質がいいか悪いかによっても大分考え方や利用レベルが変わってくるでしょう。

司会 具体例は何かございますか。

立花 このリバーフロント整備センターで研究されている大都市圏のウォーターフロント地域における住宅・都市整備手法研究会では、海に近い地域は昼間も活気のあるまちづくりを、中流域はスーパー堤防で緑のある環境に、もっと奥では生産の場との農住混合にと大変いいモデルなんです。どんな理屈や観念的な哲学をいうよりもなかなかいい。多少自画自賛になりますか。(笑声)でも何より、あちこち見て歩いて、メンバー全員が親水性のある水辺にするという視点に立つことに一致したというのが大きかったと思います。とにかく、空間があることを利用するに過ぎない計画、それを批判するだけの目は持ち続けたいですね。

司会 都市計画というお立場から何かありますか、高村さん。



高村 我々の分野でいいますと、これまでの都市計画というのは人口でも機能でもどんどん増えて、その適切な受け皿を作って行かないと非常に非効率的な都市になってしまう、例えば道路がない都市になってしまうとか、後追い型、受け皿整備型のものでした。それが最近は受け皿整備型よりは、むしろ新しい機能を開発していく観点が都市計画上也重要になってきています。例えば日本人の場合金を儲けるのは得意だけでも、金を使うのは非常に不得意みたいな(笑声)、それで金を使わせるというか、遊び方を学ばせる、新しいライフスタイルやビジネススタイルを開発によって育て上げていくことがこれからの都市開発に望まれるようになってきたと思うんですね。

司会 日本人と水との関わりから、今まで水を治めることに懸命だったという背景、そして今の都市計画への要望とお話いただきましたが、ここで少し現実に戻りまして、現在のウォーターフロント開発にはいろいろクリアしなければならない問題もあると思うのですが、いかがでしょうか。



吉田 アメリカを例に見ますと、産業構造の大きな変化で、もともとあった臨海部あるいはその湾岸沿いの工業が振るわなくなると、その地価が下がるという構造がある。その結果での再開発は非常にやり易いわけです。しかし日本の場合は産業基盤の低下が地価の低下とはならない。益々高地価状態の傾向のなかで、開発と水辺に対する要望を満たしていかなければならない。ここが大きな問題ですね。



プロフィール

吉田清明氏

昭和12年11月栃木県生まれ。昭和37年名古屋工業大学建築学科卒業。51年7月(株)U-MAC代表取締役役に就任。

司会 具体的に何か方法はありますか。

吉田 アメリカの場合ですと、カリフォルニアですが、コンサーバンシーという組織があるようです。州の公債とか沿岸保全上取得した土地や地役権を自己の資金源にして、事業制度や、補助、隔資制度等に極めて詳しいコーディネーターとしての役割を担う、第三セクターのようなものなんでしょう。日本にもそういう調整機能をもつ、中間的な組織があれば相当違うでしょうね。

立花 なかなか難しいですね。

吉田 多分そのような機関ができたのは、行政側が背景にあったのではなく、市民の様々な運動の結果のようで、日本の場合そういうエネルギーが生まれるかどうかですね。

立花 小さな声ではありますがね。

高村 今までの私的利用優先主義から公共的利用優先へと変えていくことで活力あるウォーターフロント整備を可能にしていきたいですね。

それと、もう一つの考え方としてネットワークで開発するというのがあると思います。道路なんかでも

例えばその交通機能だけでなく、最近は文化的な側面とか、見られる空間、女性が美しく見える空間を作るとか（笑声）いろいろ言われているでしょう。じゃあ歩道が広い美しい空間があって、でもそこにトラックがバンバン走っているのではこれはそんな感じにはならない。つまり全部の道路をそうすべきだという議論ではなく、ここはトラックが通るからそれはそのまま走らせて、その変わりここはなるべく交通を規制して見られる空間として大事にする。ネットワーク的アプローチを行いながら個々の道路部分の役割に思い切ったメリハリをつける。このような発想をウォーターフロントにおいても活用していく必要があるのではないかという気がするんです。



司会
松下 潤
研究第一部主任研究員

司会 では最後にウォーターフロントに対する夢を語っていただきたいと思います。立花さんからどうぞ。

立花 現実を全然考えないで無視して言うならば、今までさんざっぱら生態系を破壊してつくってきただけの、そういう科学力技術力をもって、改めて生態系の回復と、保全ができるような、そういう環境形成を目指して知恵を出し合っていくということなんじゃないかと。それが可能ならば、新たな環境創造ということもできるでしょう。それが地域の生活とのかかわりのある、何か新しい空間形成というものも可能にするのじゃないかと思えますし、大きく言えば、地球環境保全にもつながっていく気がします。

吉田 夢というのはなかなか難しいんですね。（笑声）日本の河川や水辺というのは、本来あんまりいじらずに自然だったわけですね。それを皆が享受していた。けれども最近はいろいろな生活のレベルにあわせた、レクリエーション性の高い構築型のものが求められている面も事実です。だから自然系のものと、構築

型のものとをどううまく作り上げていくか、土地や資金面を含めて、その二面性でいく必要があると思います。

ただ私個人としては、今のウォーターフロントの風潮というのは、アメリカでの派手な開発にならうような傾向が強いように見受けられまして、これは必ずしも日本の様々な状況なり、国民性に合わない部分もあるのではないかとも思えます。行ったことにはないのですが、アムステルダムのように街に溶け込むような、歴史的に見てもしっかりと根づき、住み手が街並に参加して、主流になるような水辺の空間をつくってみたいと思います。

私に関わりをもつ分野は都市とか地域といったものですので、建物を建てる際のお膳立てをするといったことが多いのですが、実際に建物をつくり、そこに人が生活する際に、どの程度まで決めておくべきかが極めて難しい。基本的なことはきっちり決める必要があるが、他はルーズな方が良いだろうと。所詮まちづくりは時間がかかるのですから、その都度住み手が変えていけばよい。古くからの街で心に残るような所は、多分にそのような背景でできているのだろうと思います。

水辺はそれ自体で人間を強く惹き寄せる要素もっているんで、人々が直接に関われる様な仕掛けがないものかと考えますね。それが生きた街なのでしょう。

高村 都市開発とか都市計画の新しい役割として、機能開発だとか、新しいライフスタイルを提案することが重要であると申し上げてきましたけど、まさにそのリーダーなり、先頭バッターをウォーターフロントが実現していくところを見たい。これが期待ですね。

司会 それぞれのお立ち場から、大変有意義なお話をお聞かせいただきましてありがとうございます。これで「大都市圏のリバーフロント地域における住宅・都市整備のあり方」についての座談会を終わらせていただきたいと思います。

（本文は、平成元年10月31日(火)18時30分からパレスホテルにて行われた座談会の速記録を、財団法人リバーフロント整備センター業務部が抄録したものである。）